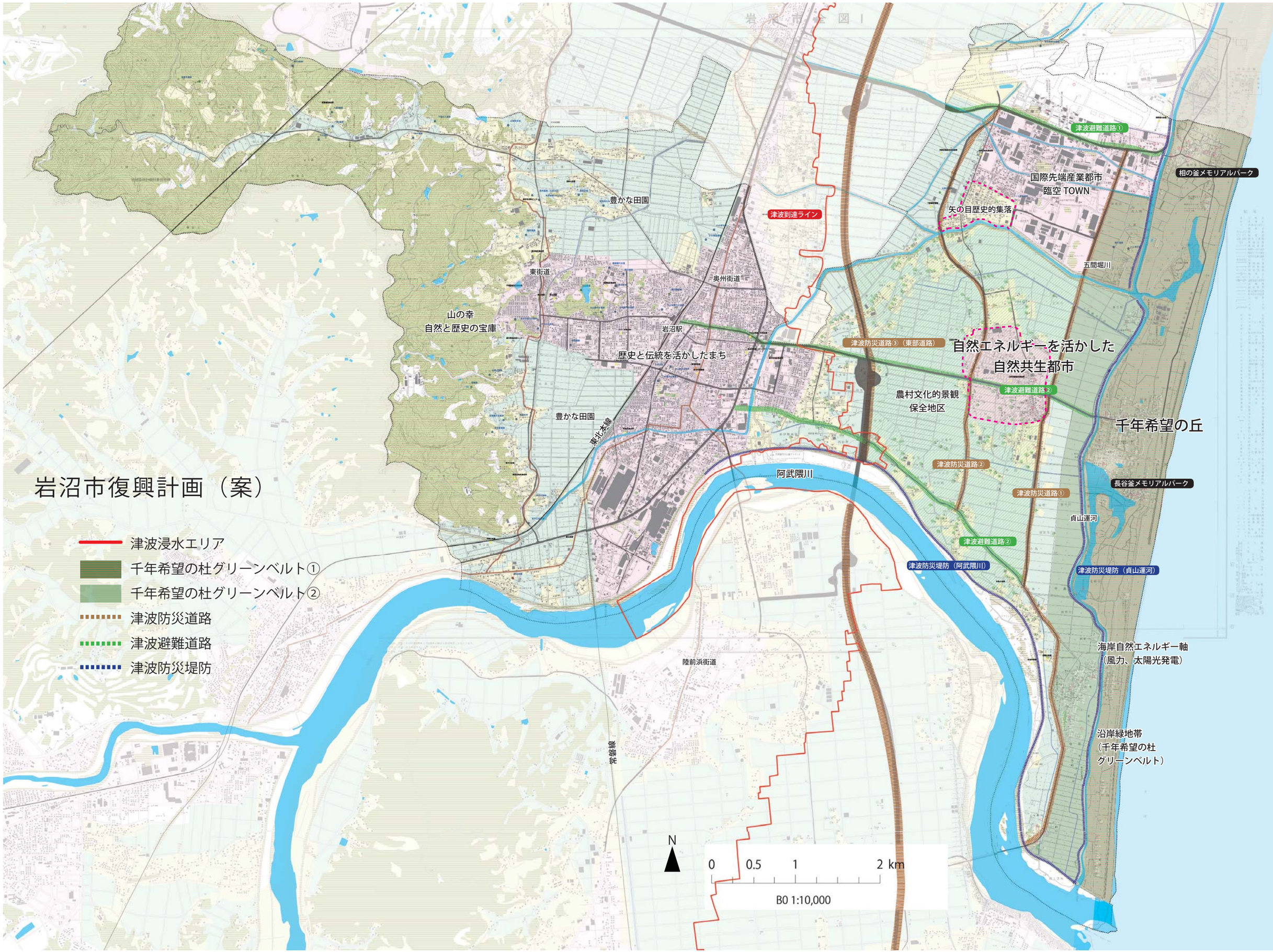
資料３－２－２
石川専門委員提出資料

岩沼市 東日本大震災 復興グランドデザイン（案）

（第二回岩沼市震災復興会議(2011 年 5 月 29 日)資料について、
同会議の議論等を踏まえて一部修正）

岩沼市復興計画（案）


津波浸水エリア
千年希望の杜グリーンベルト①
千年希望の杜グリーンベルト②
津波防災道路
津波避難道路
津波防災堤防
山の幸
自然と歴史の宝庫
豊かな田園
東街道
奥州街道
岩沼駅
歴史と伝統を活かしたまち
豊かな田園
東北本線
津波到達ライン
津波避難道路①
国際先端産業都市
臨空 TOWN
相の釜メモリアルパーク
矢の目歴史的集落
五間堀川
津波防災道路③（東部道路）
自然エネルギーを活かした
自然共生都市
津波避難道路②
農村文化的景観
保全地区
千年希望の丘
阿武隈川
津波防災道路②
津波防災道路①
長谷釜メモリアルパーク
貞山運河
津波避難道路②
津波防災堤防（阿武隈川）
津波防災堤防（貞山運河）
海岸自然エネルギー軸
（風力、太陽光発電）
陸前浜街道
常磐線
沿岸緑地帯
（千年希望の杜
グリーンベルト）
N
0
0.5
1
2 km
B0 1:10,000

はじめに

2011 年 3 月 11 日　14 時 46 分に発生した、宮城湾沖を震源とするマグニチュード 9.0 の東日本大震災は、東日本の沿岸部に壊滅的被害をもたらしました。

私たちの故郷、宮城県岩沼市は、死者 147 名、家屋被害 2,731 戸、被害農地 1240ha の未曾有の震災に見舞われました（5 月 24 日現在）。

このグランドデザインは、市民のみなさまが安心して暮らすことができる生活の、一日も早い回復を目標とし、私たちの故郷の再生に向かって第一歩を踏み出すために策定されたものです。

心をあわせて「愛のあるまち」を、つくっていきましょう。

目次

1、地震発生

2011 年 3 月 11 日　東日本大震災発生

岩沼市内の被災状況

2、復興の理念

復興の理念

わたしたちのまち、岩沼

復興のビジョン

3、復興のためのリーディングプロジェクト

1、すみやかな仮設住宅の建設と暮らしの安定

2、津波からの安全なまちづくり

3、農地の回復と農業の再生

4、雇用の創出に向けた国際、先端、臨空タウンの整備

5、自然エネルギーを活用した先端モデル都市

6、将来の世界遺産となる、松島〜貞山掘を結ぶ千年希望の丘の創造

7、文化的景観の保全と再生

4、ペアリング支援

1、地震発生

2011 年 3 月 11 日　東日本大震災発生

2011/03/12　読売新聞

東北・関

定外」M7級も　余震1ヵ月

黒い海水逆流

表層　深層

プレート境界

プレート境界型地震

津波にのみ込まれる宮城県岩沼市の沿岸＝11日午後3時56分、共同通信社ヘリから

2011/03/12　朝日新聞

大津波に襲われ、道路や建物がのみ込まれる仙台空港＝11日午後4時ごろ、共同通信社ヘリから

インフラずたずた

被災状況

被災後の岩沼

岩沼海浜緑地（赤江川）周辺

被災前

被災後

被災状況

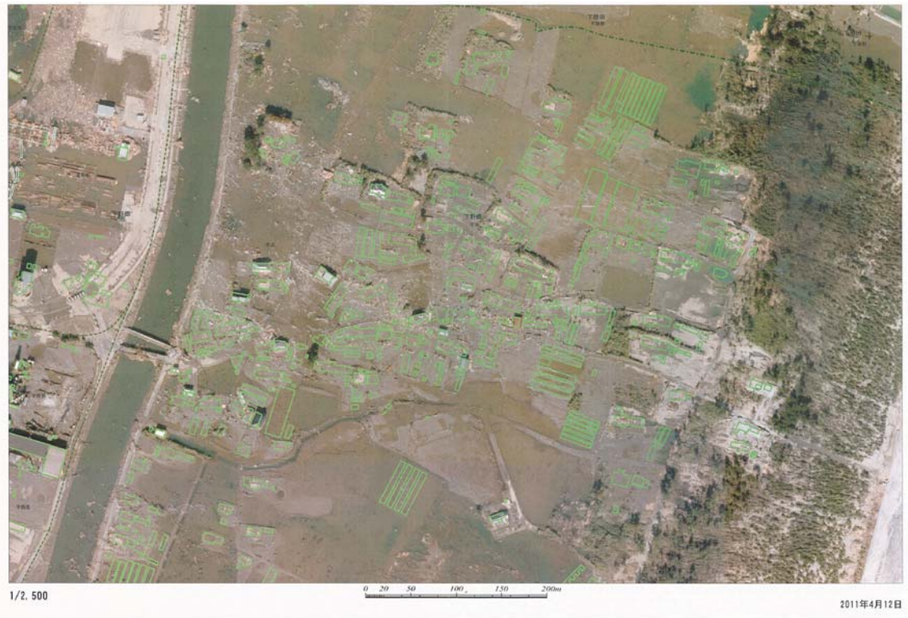
押分 二の倉周辺

被災前

被災後

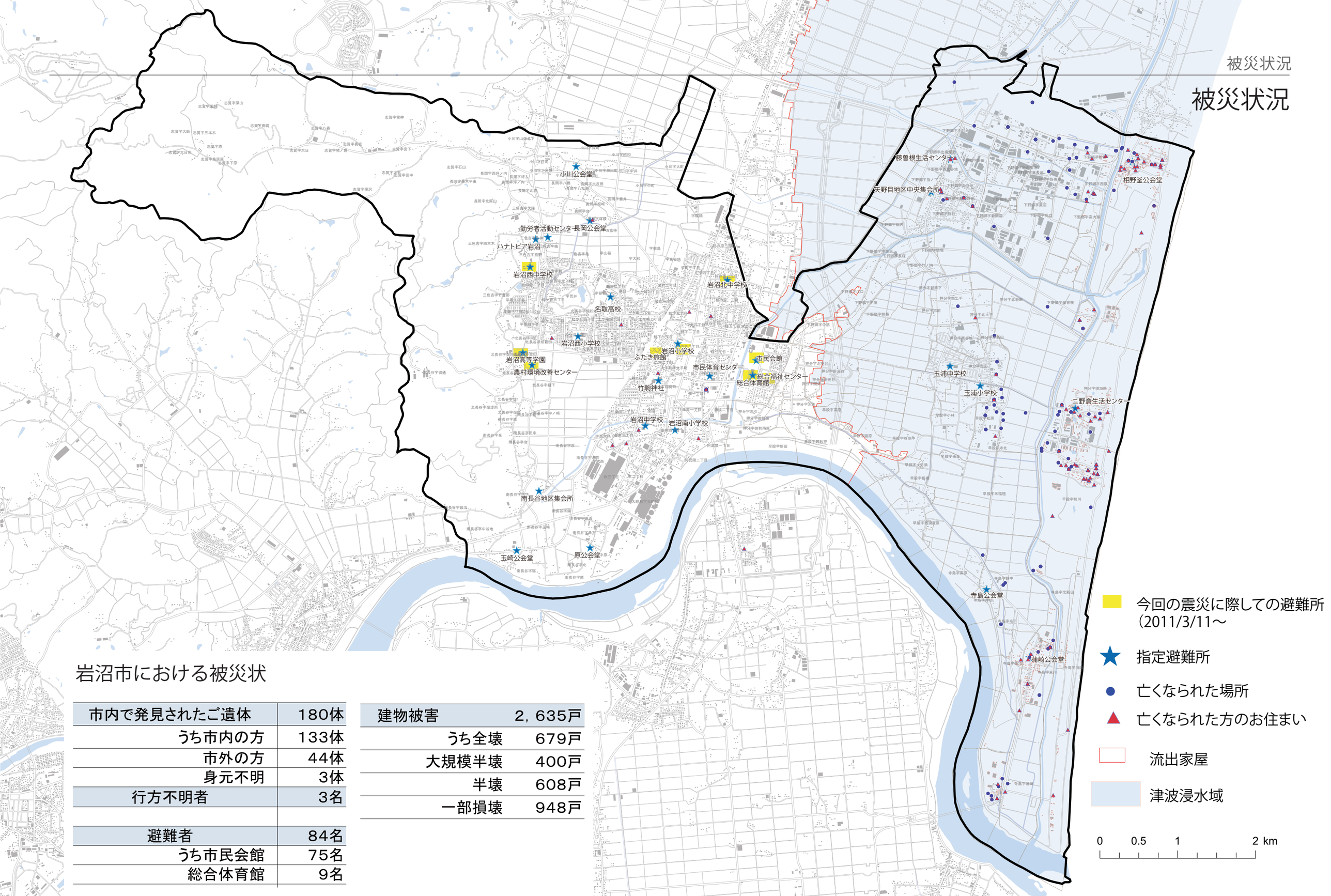
下野郷　相野釜

被災前



被災後

被災状況



岩沼市における被災状

市内で発見されたご遺体	180体
うち市内の方	133体
市外の方	44体
身元不明	3体
行方不明者	3名
避難者	84名
うち市民会館	75名
総合体育館	9名

建物被害	2，635戸
うち全壊	679戸
大規模半壊	400戸
半壊	608戸
一部損壊	948戸

2、復興の理念

復興の理念

愛と希望の復興

愛のあるまち・いわぬま
（新総合計画　平成 16 年 3 月）

1、被災者のみなさんの一日も早い生活の再建
心のケアと震災遺児の支援

2、コミュニティーを大切にした
集落再生

3、雇用の創出と
活気のあるまち

4、自然エネルギーを活用した先端都市

5、歴史の宝庫千貫丘陵、竹駒神社のまち、
津波よけ千年希望の丘

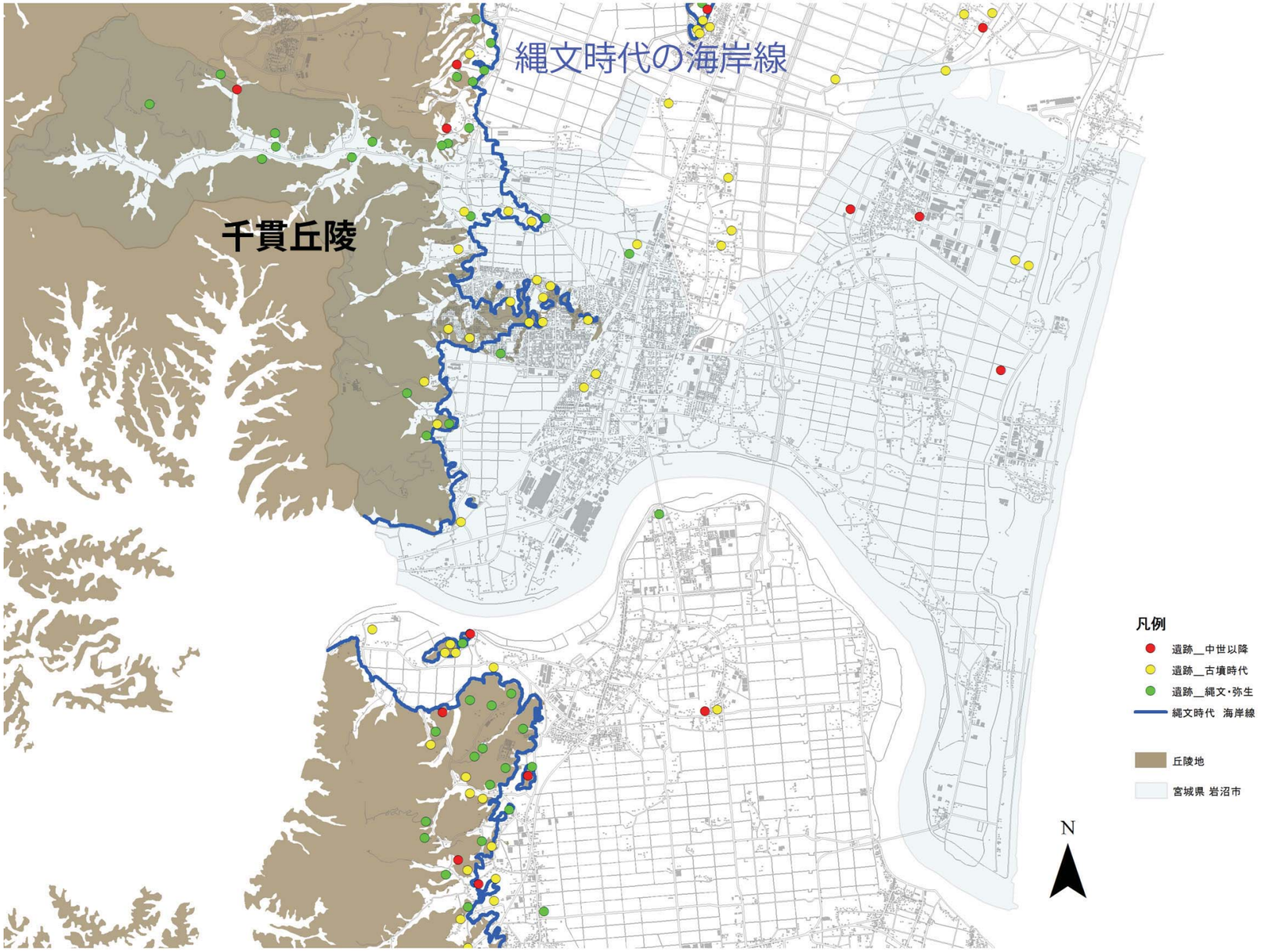
わたしたちのまち、岩沼

1. 遺跡が眠る千貫丘陵

■ かつて海であった沖野平野　ー縄文時代
市内で確認されている縄文時代の遺跡数は全部で 11 ケ所で、土器や石器が発見されている。これらの遺跡はすべて丘陵地に立地している。これは、今から約 8000 ～ 5000 年前（縄文早期末～前期）の海岸線が、図に黒線で表現した現在の丘陵地（標高約 10m）にあったためである。かつて海岸線があったこれらの地域には、「鵜ケ崎」や「上根崎」など、岬であったことを推測させる地名がのこっている。

■ 千貫丘陵周辺に集積した歴史資源ー古墳・弥生時代
縄文時代以降、弥生・古墳時代の歴史的資源の多くも、丘陵地帯周辺に集積している。発見されていない歴史的資源が眠っている可能性もあると考えられる。

千貫丘陵と縄文時代の海岸線



縄文時代の海岸線と遺跡の分布

わたしたちのまち、岩沼

2. 歴史の濃縮された中心市街地

■ 宿場町としての岩沼

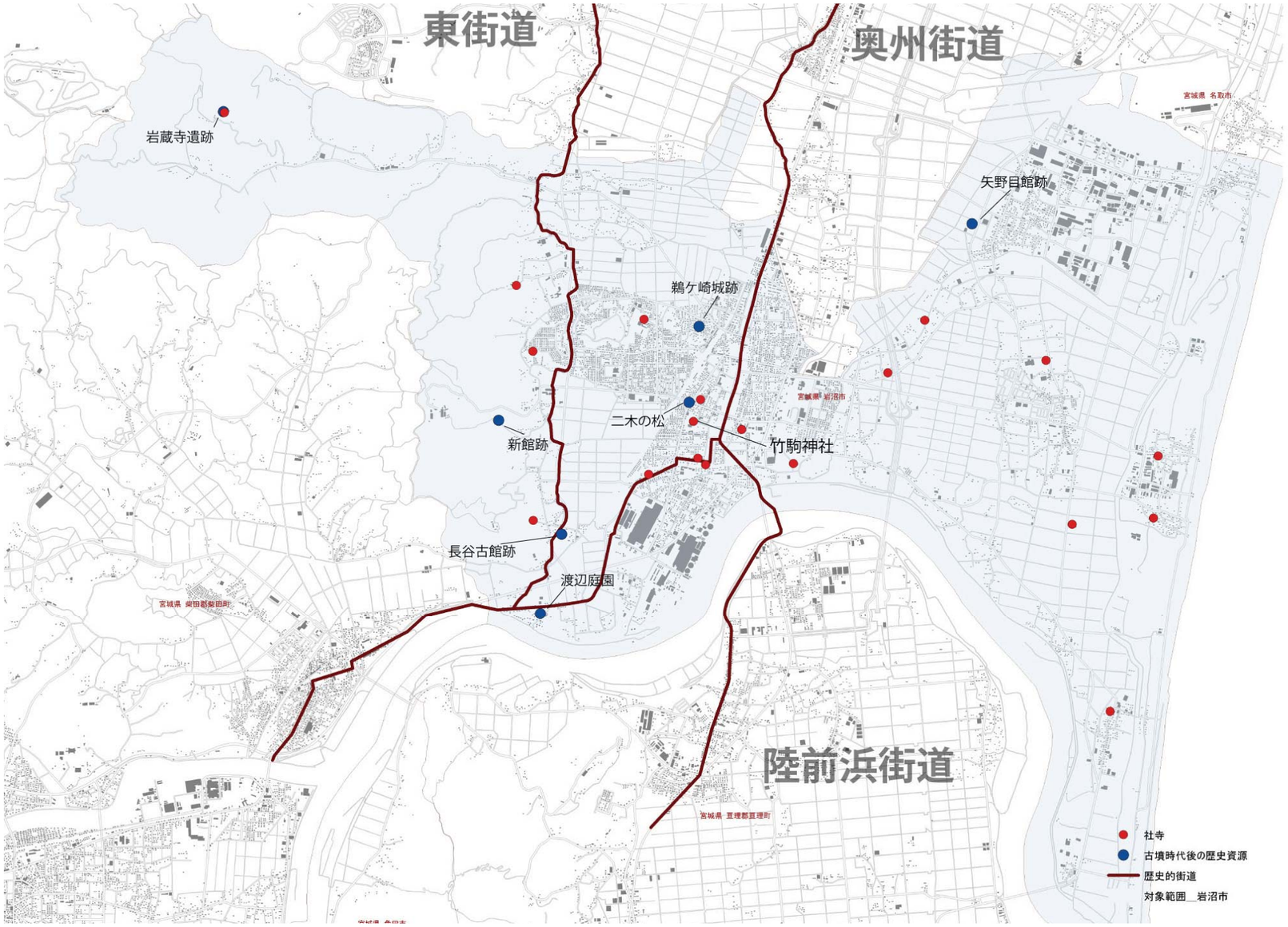
岩沼市は、「東街道（東山道）」・「奥州街道」・「陸前浜街道」の 3 つの街道が交わる交通の要所であった。そのため、宿場町として発展してきた経緯をもつ。街道の大部分は、国道として現在も使われており、奥州街道と陸前浜街道が交わる市の中心部には、現在も歴史的な資源が多く集積している。松尾芭蕉が訪れ、句を詠んだとされる「二木の松」は市の指定文化財である。

■ 門前町としての岩沼

日本三大稲荷に数えられる「竹駒神社」が存在し、その門前町としての発展してきた。竹駒神社は現在でも多くの参拝客が訪れる市内の主要観光地である。

■ 城下町としての岩沼

岩沼城が存在し、その城下町としての歴史をもつ。



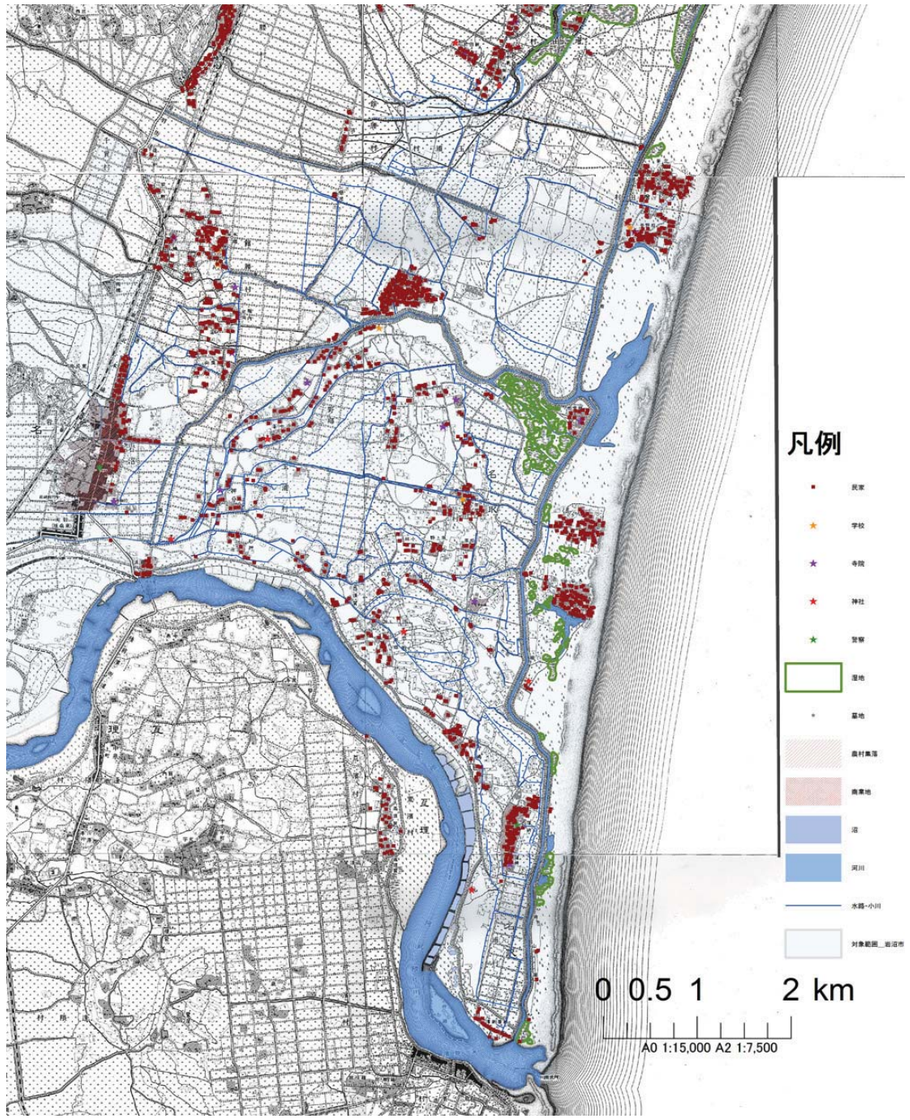
街道と歴史資源・社寺の分布

わたしたちのまち、岩沼

3. 農の織りなす文化的景観

■ 土地のポテンシャルに即した土地利用と農村風景

岩沼市東部において、宿場町として発展した中心部と、それを支える田園地域として良好な関係性が築かれていた。農村集落は明治 40 年から存在しており、居久根などに囲まれた歴史的な農村風景をつくりだしている。



図明治 40 年の地形図

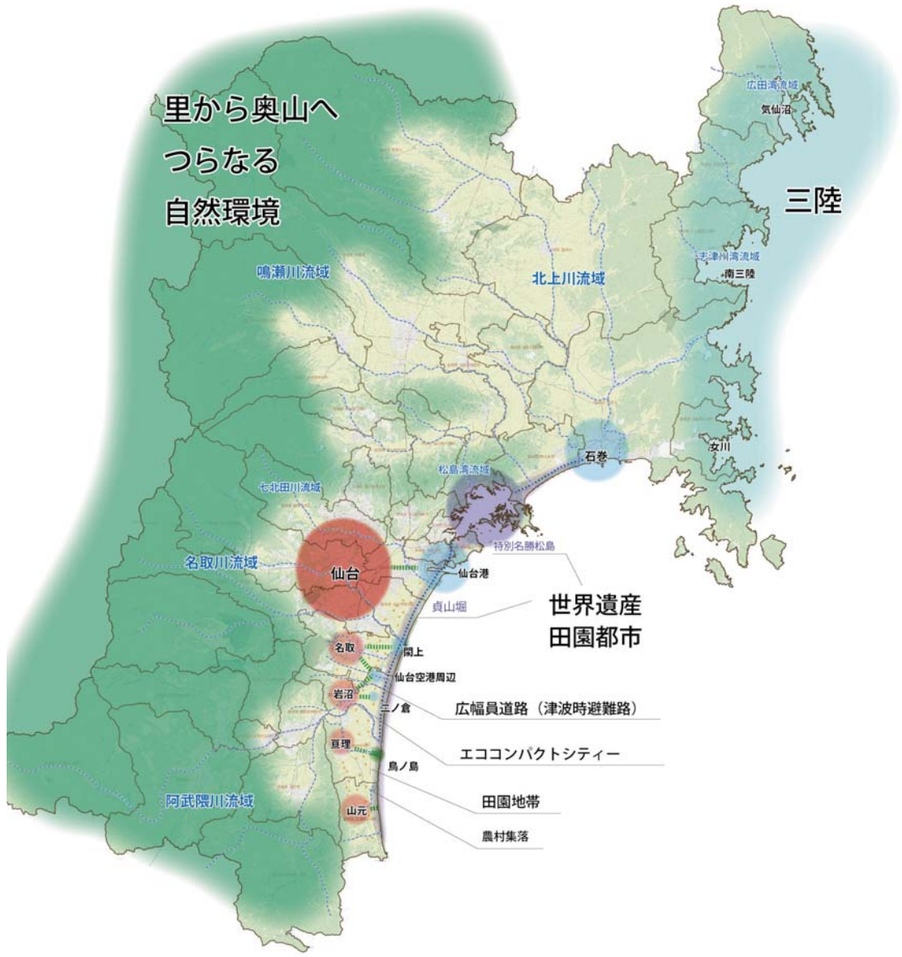
4. 貞山堀と松林

貞山堀は、塩竈から阿武隈川河口にかけて掘られた運河で、江戸時代初期・中期・明治時代の 3 時期の区間からなる。江戸時代に掘られた区間（木曳堀及び御舟入新堀）では、仙台藩南方及び北方の穀倉地帯からの年貢米の運送などが行われた。貞山堀の名称は、伊達政宗の法名からとられ、明治時代に完成したときに命名された。

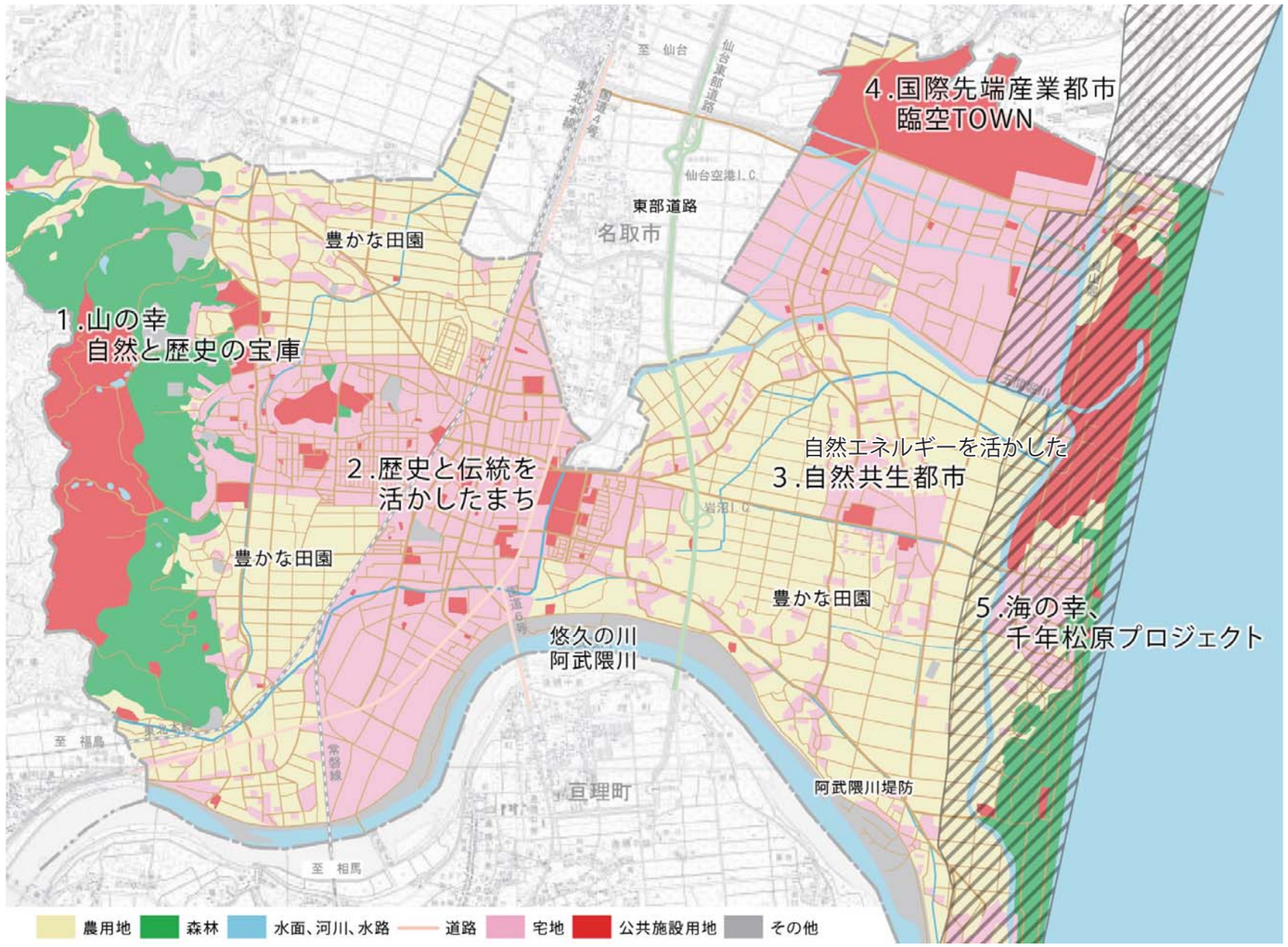
松林は貞山堀が整備された際に防潮林、防風林としての機能のために植栽され、それは現在でも豊かな田園を守るために欠かせないものとなっている。

復興ヴィジョン

■流域圏を基盤とする先端自然エネルギー・田園都市



■いわぬま復興ヴィジョン：　愛と希望の復興
（世界遺産・自然エネルギー・田園都市）



（参考）新総合計画における岩沼の未来の姿

Ⅰ. まちづくりへの想い

まちづくりには、多くの市民が共感し、共有できる「まちづくりへの想い」を持つことが大切です。その「想い」を次のように定めます。

のあるまち　いわぬま

～参画と連携で育むまちづくり～

は

○　あい・愛 …… 家族や地域、ふるさとへの愛に満ちている
○　I・英語の私と岩沼の頭文字 …… 個人（私）とまち（岩沼）が融和している
○　人 …… 一人ひとりの市民が主役になっている
○　人と太陽 …… 明るい未来を目指して歩んでいる

このように、は多様な想いを表し、市民一人ひとりがそれぞれの想いをしっかりと見つめたうえで、地域やふるさとに対して何ができるか、自ら考え行動する姿勢を込めています。

参画と連携

[参画]：市民と行政がそれぞれの立場で主体的にまちづくりに取り組むことを表します。
[連携]：まちづくりの参画者が、互いに理解し合い、協力してまちづくりに取り組むことを表します。

Ⅱ. 未来の姿

市民と行政が「**のあるまち　いわぬま**」という想いを共有し、次のようなまちを目指します。

3、復興のためのリーディングプロジェクト

復興のための
リーディングプロジェクト

1、すみやかな仮設住宅の建設と暮らしの安定

みなに優しい、緑ゆたかなくらし

2、津波からの安全なまちづくり

コミュニティーを尊重した集団移転によるエコ・コンパクトシティーの実現
（三軒茶屋地区）

3、農地の回復と農業の再生

4、雇用の創出に向けた国際、先端、臨空タウンの整備

5、自然エネルギーを活用した先端モデル都市

6、将来の世界遺産となる、松島～貞山掘を結ぶ千年希望の丘の創造

国際観光都市、生物多様性の宝庫

7、文化的景観の保全と再生

ペアリング支援の推進

1、すみやかな仮設住宅の建設と暮らしの安定　皆に優しい、緑ゆたかなくらし

(1) 考え方

皆にやさしいまち

－ゆるやかで連続的な環境移行を支える復興・仮設住宅－

＊環境移行：人間がある環境から他の環境へ移ること、およびそこで生じる状態。
突然あるいは激変する場合は混乱し、不適応を起こしやすい。

■ 被災地の活力ある再建に求められること

・誰もがが孤立することなく、安心してコミュニティ内での役割をもち暮らし続けること。
・このことが、すべての人が将来に向けて安心して過ごせる少子高齢社会のコミュニティづくりとなる。

■ 復興への考え方

「避難期」、「仮設期」、「復興期」の全過程を通じたゆるやかで連続的な環境移行の支援とコミュニティ復興の連続性の確保が必要。

（1）環境移行の支援

従来からの生活、コミュニティが損なわれることなく、被災者が自分らしく生活し続ける環境を確保できるような支援

（2）避難所から復興コミュニティに向けての連続性

避難所から復興後の生活に至るまで「住まい」「生活」「かかわる人」が途切れることなく引き継がれることが重要。

■仮設住宅における暮らしのサポート

住まいの連続性を担保する「多様な仮設住宅」と「(仮) サポートセンター」の提案
コミュニティが崩れることなく避難所から仮設住宅に移れること

（1）住まいとケアの原則

・サポート（ケア）付きの住まい
・高齢者の寝たきり予防、介護予防
・コミュニケーションの取れる共同空間を持つこと

（2）多様なタイプの仮設住宅

・戸建型、コーポラティブ型、グループホーム型など
・コミュニケーションのとれる共同空間を持つ。

（3）「(仮) サポートセンター」

まちの核には (仮) サポートセンターがあり、高齢者を含む全ての人がその人らしく過ごすためのケアシステムが展開されている。

■復興の可能性

（1）地域社会で孤立をせずに暮らせるまち

・住宅に閉じこもらず、人とのつながりを維持できる交流の場や機会をもつことができる。

（2）高齢者が能力を活かし可能な限り自立できる高齢者パワーが支えるまち

・ 介護ヘルパーや子育て支援、配食サービスやふれあい喫茶等、いくつになっても地域を支えるコミュニティビジネスにとりくめる。
・趣味の活動、ボランティア活動、いくつになっても自己実現ができる。

（3）たとえ弱っても、元気な頃の生活習慣をケアミニマムで維持できるまち

・睡眠、食事、保清、排泄、離床・移動、更衣。生活のリズムを維持すること。
・ 在宅医療、在宅看護、在宅介護による支え。
・ コミュニティやインフォーマルサービスによる「見守り」。

（2011/04/15　西出和彦）

(2) すみやかな仮設住宅の建設

・仮設住宅は、宮城県の第１次から第３次の計画により３２４戸（里の杜東住宅１６２戸、里の杜西住宅１６２戸）が完成し、４月２８日に１０２戸、５月１３日に６０戸、５月２０、２１日に１６２戸が入居しています。
・第５次計画により建設中の６０戸（里の杜南住宅）については、６月３日に入居を開始する予定です。
・市営住宅（６戸）、県営住宅（１２戸）、雇用促進住宅（８戸）を仮設住宅として準備し、現在は１１戸が入居しております。

仮設住宅の各団地への入居地区は、下記のとおりです。
　里の杜東住宅→相野釜地区、長谷釜地区、二野倉地区
　里の杜西住宅→藤曽根地区、蒲崎及地区、寺島地区、林地区の一部
　里の杜南住宅→矢野目地区、林地区の一部、市外

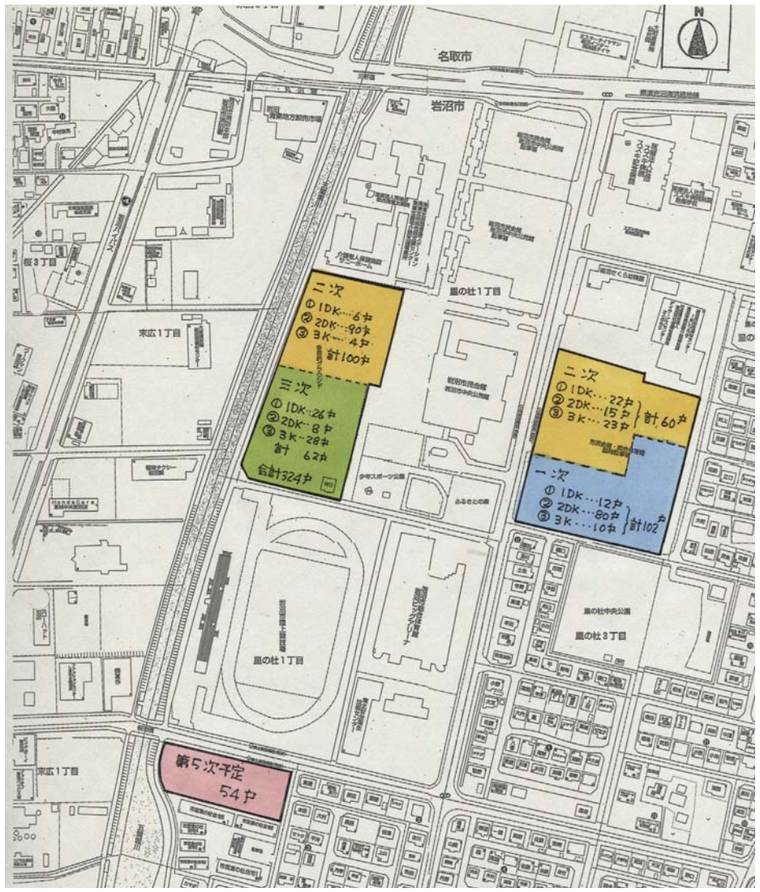
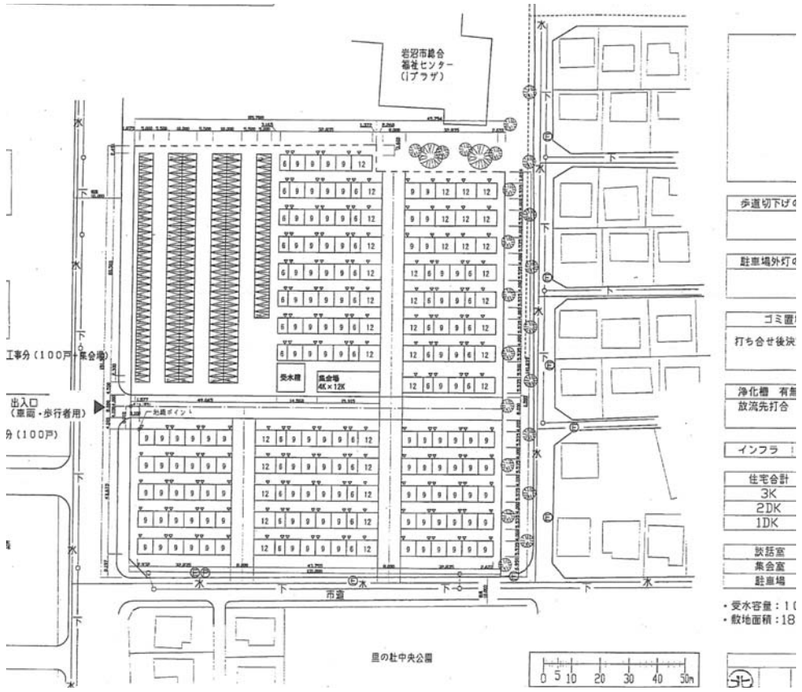
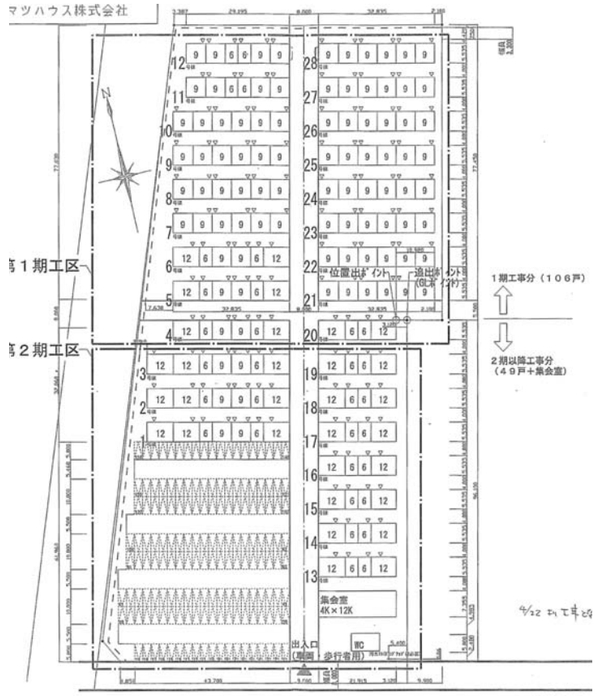


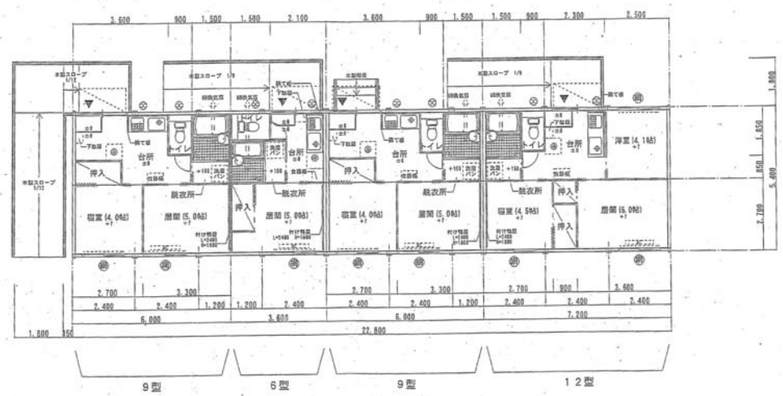
図　仮設住宅位置図



里の杜駐車場仮設住宅



多目的グラウンド仮設住宅



仮設住宅　標準図

(3) 暮らしの安定：緑ゆたかなくらし

■緑化計画

仮設住宅のなかで緑ゆたかなくらしを営めるよう、四季の移り変わりを楽しむことのできる小庭や、トマトやネギへちま等の菜園、ヘチマ・ニガウリ等を用いた緑のカーテンなど、住む人が緑化に関わることができる設計とします。

2、津波からの安全なまちづくり　ー　自然共生都市

コミュニティーを尊重した集団移転によるエコ・コンパクトシティーの実現
（三軒茶屋地区）

A：
既存の区画整理地区

B、C：
新たに市街化区域とし、被災地集落の集団移転地とする

D、E：
農村エコビジネスの展開による雇用の創出
例）ファーム・レストラン、地場産野菜の活用

F：
農村集落の文化的景観の保全